国語国文学専修
卒業論文成績優秀者
による研究成果
要旨集2021

『雨月物語』「菊花の約」におけるドラマチック性についての考察

文18-0444
寺本春奈

『雨月物語』とは

作者、上田秋成。江戸時代後期に成立した読本であり、怪談小説集。
中国白話小説を翻案したものであり、全九篇から成る。
「菊花の約」は、『雨月物語』の二話目にあたる物語である。

そして、長らく「信義の物語」として知られてきた。

本論文は、演劇論や心理学といった、他分野からの視点を中心として、この物語のドラマチック性について考察していくものである。

先行研究の傾向

①原話との比較によって、秋成自身の創作部分の意義を考える。

②物語全体の構成分析。

③「軽薄の人」とは誰かを問う。

④「信義」について

多少の例外は存在するが、概ね上記の4つに分類が可能である。

再会の場面（暗転・ライトアップ/視点のスイッチング）

○暗転・ライトアップ

●暗転とは・・・演劇で幕を下ろすことなく、舞台上を暗くすることで場面転換などを行う。
●ライトアップとは・・・照明を当てて、明るく浮かび上がらせること（本論文使用）

魂となり約束を果たしにやってきた宗右衛門の姿を月明りを利用して、浮かび上がらせることで、左門に認識させるという手法が本文中で使用されている。
一度文章の明度を暗転で落とし、ライトアップで再度明度を上げることで、読者に印象深く感じさせている。

○心理的な暗転・ライトアップ

心理本文の文章表現における暗転・ライトアップと並行して、登場人物の心理的な暗転・ライトアップをも同時に見て取ることができる。
・心理的暗転・・・気持ちの降下、落胆、孤独感、絶望感など
・心理的ライトアップ・・・気持ちの浮上、高揚、興奮、歓喜など

本文中、宗右衛門の帰りを待ち続け、再会し、別離までの左門の感情の変動が心理的な暗転・ライトアップによって、明瞭に表現されている。

○視点のスイッチング

暗転・ライトアップという演劇的手法が行われるとき、同時に「視点のスイッチング」が行われている。
神の視点（第三者）の視点で読み進めていた読者の視点が、暗転・ライトアップの瞬間に、左門の視点とリンクするのである。
この先からは、無意識のうちに、左門に視点で物語を読み進め、左門の感じている感情すらも追体験していくのである。

この視点のスイッチングが起こることによって、読者は物語へとより一層没入していくのである。

山場に彩りを与える設定（「静」と「動」の対比/時間を切り取る）/まとめ

○「静」と「動」の対比

本論文では、生命あるものを「動」の存在とし、生命なきものを「静」の存在と仮定する。

・左門自身、その周囲・・・「動き」に溢れかえっている。
・宗右衛門・・・動作表現が少なく、「静」かな存在といえる。

再会後に泣く場面を例に挙げると、左門は大声をあげ、蹲り嘆きかなしんでいるのに対し、宗右衛門はただ大粒の涙を声も上げず流すだけである。
二人の「静」と「動」の対比が、場面を彩る要素を担うとともに、この二人が相容れない存在であることを、読者に提示しているのである。

○時間を切り取る

現実（左門の生きる時間軸）から、切り取られた時間へと、読者はある一文から足を踏み入れる。
①その空間に存在している間は、幽霊が見えても何ら不思議はないのである。
②切り取られた時間（空間）は、「幻想や夢や超現実」と出会えるところである。

①、②のような空間（時間）が存在することで、現実世界へと戻ってきたとき、物語をまるで「見て」いたかのような感覚を抱くことになるのである。

まとめ

作品の中に盛り込まれている「詳細な設定」を読者には、明け透けに感じさせないような構造が存在する。
この構造の一端を担っているのが、演劇的手法である「暗転・ライトアップ」である。
そして上記による巧みな「視点のスイッチング」であり、再会の場面を彩る、「静」と「動」の対比、再会の場面を終結させる時間の切り取りである。
加えて、物語を「見る」という感覚が、ドラマチック性の最大の要因であると、本論文では結論付けた。